

表紙解説

「坪内逍遙肖像」 大木豊平画 制作年不明 ©大木興二

一軸 本紙一二四・三×四二・四cm（外寸二二二・七×五六・四cm） 紙本彩色

印記「九曜文庫」 中野幸一旧蔵 文庫三〇―E三二八

大木豊平（とよへい）（一八九九―一九八〇）は千葉県出身の日本画家。蔦谷龍岬・島田墨仙に師事したとされる。人物・山水画を得意とした。大正八（一九一九）年二〇歳で帝展に入選。昭和六（一九三一）年、「祝典祥光」が帝展の特選に輝き、その手腕は高く評価された。その後、帝展委員、日本画家審査委員、帝国美術院委員等を務める。

大木と坪内逍遙（一八五九―一九三五）の出会いや交流については詳らかではないが、御子息大木興二氏によると次のような逸話が残る。大木が雅号を付けてもらおうと逍遙のもとを訪れたところ、逍遙は大木の本名「豊平」をたいそう気に入る、そのまま雅号にしてはと言うので、大木は喜んで「豊平」を雅号にしたという。

なお、本学演劇博物館には、本肖像画の下絵を所蔵する。逍遙の側近生田七郎によって昭和一二（一九三七）年に記された来由書によると、逍遙が晩年過ごした熱海の双柿舎の様子が大木が写生した折に、著作に従事する逍遙を偶々垣間見、後にその姿を描いたのだという。逍遙日記をひもとくと、昭和九（一九三四）年四月九日条に、「大木豊平、前景を写生、夕方まで」という記述が見出される。おそらくこの日のことであろう。当時、逍遙は七五歳、翌年二月不帰の人となる。一方、大木は帝展への入選を重ねる気鋭の画家であった。

本学では逍遙の肖像画を他にも数点所蔵するが、その中において本肖像画は、最晩年における逍遙の日常を捉えた貴重な作品と言えるよう。

薩摩治郎八関連資料より



(本文25頁参照)